

2 学習意欲を育て、他者と協働しながら考え続ける力を育む授業づくりの実践

「広い心で 相互理解・寛容」(第5学年)

資料名：ブランコ乗りとピエロ（香川県小学校道徳教育研究会 5年「わたしのいく道」）

(1) 育成したい「思考力」と学びに熱中する子どもの姿

【育成したい「思考力」】

謙虚な心を持ち、相手がどのような見方や考え方をしているのかを考えることで、自分と異なる立場の人の意見を理解したり認めたりしようとする力

ピエロのサムを憎む気持ちが消えた理由を話し合いながら、より深くサムの気持ちを考えたり、ピエロのサムに対する憎しみの原因を、自分と重ね合わせて深く探ったりしている。

【学びに熱中する子どもの姿】

子どもたちがより広がりや深まりのある人間関係を築いていくためには、友達と考えや意見を相互に認め、理解し合いながら高め合う関係を築くことが必要である。同じような考えをもつ子どもどうしが集まって集団を形成しがちな高学年の段階であるからこそ、友達と考えや意見が合わない時に、一方的に自分の主張を押しつけることなく、自分の考えと同様に相手の主張も尊重することで、より広がりや深まりのある人間関係を築いていけるのである。本時は、相手がどのような見方や考え方をしているのかを考えながら、相手の立場に立って謙虚な心で人と接しようとする力を育てていった。

古くからのスターでありサーカスのリーダーでもあるピエロと、スター気取りでピエロの言うことを聞かないブランコ乗りのサム。最初はいがみ合っていた二人が最後には分かり合えるのだが、子どもたちは、ピエロのサムを憎む気持ちが消えたことに疑問をもち、資料を読み進めていった。そして、「自分だったらサムを許せたのだろうか。」「なぜピエロはサムを許すことができたのだろうか。」と、対話を通して、ピエロの見方や考え方について、自分の考えを深めていった。そうすることで、自分の見方や考え方で相手を理解しようとするのをやめ、相手の見方や考え方を自分の中に取り入れ、相手を理解しようとするものの大切さに気付いていったのである。このように、資料の中のピエロに自分を重ね、対話を通して見方や考え方の変化を深く捉えようとする姿が、学びに熱中する姿である。

(2) 学習意欲を育て、他者と協働しながら考え続ける力を育むための働きかけと子どもの姿

① 挙手を促し、集団内の多様な立場の存在を明らかにする

資料の前半部分を読んだ子どもたちに、「自分がピエロだったら、サムを憎む気持ちが消えますか。」と問いかけ、挙手を促した。自分勝手な行動をするサムへの憎しみは消えないと感じる子どもと、スターであることを自覚して頑張っているサムに共感し、憎む気持ちは消えると感じる子どもがいた。また、どちらにも少しずつ共感し、決めかねている子どももいた。子どもたちは、同じ人物についての考えや感じ方が違う友達の存在に気付き、その理由を聴きたいと対話への意欲を高めていった。



【挙手でそれぞれの立場を明確にする】

② イラストによって、経験を想起させる

サムを憎む気持ちがピエロの心から消え去った場面では、子どもたちは、サムの努力を認めたピエロの気持ちを、自分の経験と重ねて捉えやすい。しかし、「自分もサムと同じように目立ちたい。」と自分

を振り返り、自分の見方や考え方を反省するピエロの気持ちが自分にもあることには気付きにくい。そこで、子どもたちの日常にある場面として、お楽しみ会の出し物の時間を友達に一部使われてしまうイラストを提示し、経験を想起させた。それにより、子どもたちは「あー、あるある。」「昔あったよね。」と、自分にもこれまでに同じような経験があったことに気付くとともに、そのような子ども自身の経験と、「私も目立ちたかった。」と自分を振り返るピエロのことばをつなぎ、ピエロの謙虚な気持ちに気付いていった。



【経験を想起させるイラスト】

③ 対立軸を明確にして選択を促す発問を行い、多様な価値観を比較できるようにする

なぜピエロのサムを憎む気持ちが消えたのかを話し合う際、「私もサムと同じように目立ちたい気持ちがあったことに気付いたから。」「サムが力いっぱい頑張っていると気付いたから。」の二つを板書上で対比できるようにした。そして、「ピエロがサムを憎む気持ちが消えたのは、どちらに気付いたからですか。」と問いかけた。選んだ理由を話し合う中で、子どもたちはより深くサムの気持ちを考え、ピエロのサムに対する憎しみの原因を自分と重ね合わせて深く探ったり、相手を理解することの大切さに気付いたりしていった。

子どもの姿（対話場面）

T：ピエロがサムを憎む気持ちが消えたのは、どちらに気付いたからですか。あなたならどちらですか。自分も目立ちたい気持ちがあったことに気付いた側の人に聞いてみよう。

C1：自分もしたことがあるなら、人には言い返せない。

C2：昔は自分がしていて、それで人に言うのは難しい。

C3：昔の自分のことを思い出して言えない。

T：サムの頑張りに気付いた側で言いたいことがある人。

C4：サムは演技を力いっぱいしたから。お客のために一生懸命していたから。

C5：サムもピエロもどちらも目立ちたかったから…。



【対立軸を明確にして選択を促した後の対話】

この対話場面の後、ピエロのサムを憎む気持ちが消えた理由として、どちらの気付きがより大きかったのか迷い、沈黙する子どもたちの姿が見られた。その姿からは、ピエロに自分を重ね合わせて気持ちを考えていたことが分かる。そして、サムの頑張りを見て許すことがより適切ではあると考えながらも、ピエロの「私も目立ちたかった。」という思いを捨て去ることの難しさに気付いていたと考えられる。相手のことを真に理解し、寛容であることの大切さとその難しさについて、子どもたちは自分の課題として捉え、対話を通して考えを深めていったのである。

（３）考察

資料の中の人物と自分自身をつなぐことによって、子どもたちは主体的に道德の時間に参加し、考えを深めていった。さらに、学級内の多様な立場の存在を明らかにするとともに、子ども自身の立場を明確にすることで、「友達の考えを聴いてみたい。」と、対話への意欲も高めることができたと思える。

今後、例えば、子どもたちが規則を守ることと寛容であることとの間で葛藤を感じる場面に出合っても、自ら善悪を判断したり、人として望まれる対処法を判断したりできるよう、継続的な指導が必要である。そうして、本時の学びがより広く長期的に生かされることで「思考力」は育成されていくのである。そのためには、例えば、自己評価や教師による評価の継続と、生活場面における子どもたちの様子を「長期エピソード」として記録し、活用していく具体的な方法について研究を深めていく必要がある。